

＜若手の会＞活動報告

日本家政学会若手の会は 1996 年に発足し、今年で 16 年目を迎えた。本年は「家政学、家庭科教育の進むべき道～家庭科教育の現場からの提言～」と題する講演会を企画し、大会 2 日目の 5 月 13 日（日）13：50～15：20 大阪市立大学 J 会場にて開催された。参加者は例年より多く、65 名の方にご参加いただいた。

本企画の目的は、高等学校での家庭科の男女共修化が 1994 年に開始されて以来 18 年が経過しようとしている中で、現役の男性の家庭科教員 2 名と大学での家庭科教育に携わる 1 名を講師として招き、家庭科教育の現状について伺うとともに、これからの家庭科教育や家政学のあり方について考える、というものである。

講演 1「高校家庭科の現状と、高校生が思う「家政学」像」では、谷昌之氏（大阪府立貝塚高等学校）より、授業での実践内容や高校生の持つ「家政学」「家庭科」に対するイメージについてアンケート結果をご紹介いただいた。大阪府の男性家庭科教員も徐々に増え、「家庭科」に対する高校生男女の意識の差は少なくなっていることなどを実感していることなどが語られた。講演 2「家庭科教育の現場に入ってみて」では、中島正家氏（大阪府立桜塚高等学校 定時制の課程）より、定時制高校での教育経験についてご紹介いただいた。幅広い年齢層の生徒が学び生徒を取り巻く環境も様々な定時制高校での授業実践の工夫や、生徒との信頼関係が大事であることなど経験を通して感じていることなどが語られた。講演 3「家政学とは何か、家庭科教育とは何かを問い続けて」では、大竹美登利氏（東京学芸大学、元日本家政学会会長）より「家政学とは何か」という問いが学会で議論されてきた経緯や家政学研究の特徴、家庭科教育の変遷などが語られた。

講師の先生方からは大変示唆に富むご意見も数多くいただいた。谷氏からは、大学の学部・学科名称や内容の細分化・複雑化により高校生の進路選択と結びつきにくい、大学でも教養科目として家庭科を必修化できるとよい、中島氏からは、複数教員で指導できる体制づくり、家庭科の時間数の確保などのご意見をいただいた。

これからの家政学や家庭科教育を考える上で、改めてそのよさや課題を考えるきっかけとなり、家政学に関わる研究者や家庭科教育の教育者などが一同に会した。今後も家政学研究の発展を考え、交流の場を図れるように若手の会の活動を推進していきたい。

なお、企画終了後のアンケートでは「実践的なお話を聞くことができ、とても勉強になった」「実感を持たせる授業の組み立てや、分野間、大学等における家政学との連携など、共感した」「大学と小中高の連携ができればと思った」などの意見が寄せられた。アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP（http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/）上に公開している。

（若手の会幹事一同、文責・松田典子）

